

石巻・郡山での6年間の聴きとり調査から、 被災地の人々の現実と『復興』の思いを考える

武庫川女子大学 上田孝俊

1. 『復興』が地域ハラスメントに陥っていないか という問題提起 ～坂上英和（NPO 法人コー スター理事）への聴きとりから¹～

坂上は福島県富岡町出身で、郡山市でコミュニ
ティ・スペースの運営と田村市や川内村などの地
域再生に関わる中間支援を行う NPO 活動に取り
組む若者である。

川内村（福島第1原発から約20km）は震災時
人口2,992人、1,119世帯であり、2016年6月
14日に全村制限区域の解除、2017年4月現在で
2,173人、909世帯が村内に生活し、534名が村
外に暮らしている。村外の仮設住宅は2017年3
月に閉鎖され、残された人々は自主避難となった。

郡山市にある川内村からの避難仮設住宅住民
の支援に坂上は関わってきた。物資支援が行き渡
ったと考えられていた2013年の段階でも、現地
に入ると米も買えないという貧困状態にある人々
もいて、その格差が拡大していると感じた。そこ
で、住民の個別の声（要求や欲求）を聴きとろう
と、石巻での例にならい「エアコンの掃除」を名
目に家庭に入り込んだ。「集会所では話せない」「知
っている人がいると話せない」のであれば、家
の中でしか本音や困りごとをしゃべれないと考えた。

住民から聴かされたことは、帰還することへの
不安であった。坂上は「部活を一週間も行かな
ければ、行きにくくなる。」「6年間も行かなか
ったのに、そう簡単に帰れるはずはない」と感じ
たという。帰還する前の段階で、「村を作り直す」と
いう議論が先にあるべきで、戻れる人は戻れるが、
隔たりがある人はそういうわけにはいかない。「地
元だから戻らなくてはいけない」という「地域を

愛さなくてはいけないというハラスメント」がお
きているのではないかと。違う場所で生きてと思
う人の支援が抜け落ちてはいまいか。それぞれが
選択肢を持てる環境があるかどうか問われるべ
きだという。さらに、復興ということが元に戻る
ということであれば、復興したいと考える人も
いるのではないかと。「住みやすい生活がしたい」と
いう多様性（diversity）を認めないハラスメント
であるともいえる。

なお川内村の住民基本台帳からは、村内生活者
率は80.3%であるが、村内の就学者数は、保育園
25人（住民基本台帳上は66人、村内就学率37.9%、
以下同様）、小学校45人（78人、57.7%）、中学
校17人（47人、36.2%）、全体では87人（191
人、45.5%）であり、学齢期の子どもを抱える家
庭が帰還しにくいという状況や感情におかれてい
ると考えられる。

一方、第二原発の一部が位置する富岡町では、
今廃炉に向けて、震災前の10倍以上の雇用が行
われている。こうした原発廃炉関係産業が「40年」
以上続くことも事実としてある。

2. 被災地の人々の6年

1) 被災直後のコミュニケーションに成立する感情

中井久夫は、被災直後の「共同体感情」を次の
ように著している²。

「共同体感情」は主に同じ体験を共にしたと
いう感覚の上に成り立つのであるが、これは一
つは PTSD を中心とする災害心理症候群を共
有することによるものであり、もう一つは貨幣
経済と階層社会の一時停止による、文字通りの

「コミュニケーション」に成立する感情である。

レベッカ・ソルニットが、災害や重大事故、事件の被害者たちが、その最中に人間性溢れる行動をおこし、またそこから共通して「災害ユートピア」(A Paradise built in Hell)を感じた人々の体験を著したのも同様であろう³。

避難所においては、「相互の体験の話し合い」による『スピーク・アウト』が自然発生的に行われ⁴、個別的な被災体験であるが、共感し合うことも可能であり、それぞれが語ることに真摯に耳を傾けあった。惨事に直面したときの、他者の生命を相互に守り合う自治的集団の本能的機能といえよう。郡山市での母親からの聴きとりでも、原発事故直後の家族にも相互の深い思慮がうかがえた⁵。

2) 格差や差別と、支配的なストーリー

中井久夫は引き続き、次のように述べている。

それが（「コミュニケーション」）が一過性のものであるのは理の当然である。数日後に学校が再開され、貨幣が必要となり、さらに貧富の差が再建の過程で現れると、この共同体感情が色あせて自然である。振り返れば夢まぼろし、あるいは錯覚としか思えない。また実際に錯覚でもあるだろう。

家族のストーリーさえバラバラになっていく。ましてや地域のストーリーは、個々人の描くストーリーで他者の言動を解釈し、それを押しつけていく。共感とか共同体感情は薄れていく。女川で仮設住宅に移れずテント生活を余儀なくされていた家族が、その理由を親戚から「テントの下にお金を隠しているからと違うか」と揶揄された悔しさを語っていた。郡山でも、原発事故から1年後には、放射能や一時保養の問題など保護者間で「びったりやんだという感じ」になったという。そうした背景に、中井が言うように「貨幣経済と階層社会」の『復興』があることは当然である。

同時に、意図的な『復興』のストーリーが政治

や専門家という人々から、マスコミなども利用し、注入され続けたことも事実である。坂上も「声が大きい人だけが暮らしやすい地域」がつくられてきていると言う。富岡出身の彼が仙台に住みながら震災時に感じたことは「地域に密着しなきやという思いの強さ」であり、それが「しんどい」ものだったと語っていた。

3) 「未来」を見つめたそれぞれの生き方保障

坂上は、富岡町で「語り部の会」⁶（代表・青木淑子元富岡高校校長）の法人化、事務局体制の整備も支援してきた。坂上は、こうした人々の取り組みを「未来を見つめた」と評価している。それぞれが、過去・現在・未来をどのように整理するかということが、それぞれのステージで「語る」ことに求められるからだという。

宮城県東松島市鳴瀬未来中での制野俊弘の実践も、生徒がそれぞれのステージに応じて「感情を賦活させる」場を用意すること（御神楽の実践）、そしてこもる思いをスピーク・アウトできるように支え合うこと（命の授業の実践）にあったと思う。

「大きな声」がこうした個々の思いをかき乱そうとするなかで、「承認欲求」や「自己肯定」を担保できるのは、現実を直視し、自分の「声」として発することができるということにある。格差や個々の相違が広がる中での「疎外」感を訴えるに留まらず、未来を描く「声」となるまで聴きとる、支援する者の役割とその責任を感じる。

¹ 坂上氏へのインタビューは2017年2月20日に行った。

² 中井久夫『復興の道なかばで』みすず書房、2011年、p.27。

³ 高月園子訳で亜紀書房から『災害ユートピア』と題して2010年12月に出版された。

⁴ 中井久夫、前掲書、p.63。

⁵ 拙稿（宗像家子との共著）「低線量被ばくのなかで生きる母親の孤立感と一時避難・一時保養の意義」（『臨床教育学研究』第4巻、2016年）に記述している。

⁶ 「語り部の会」のもっとも若い一人が、富岡町出身で双葉高校・安達高校に在学した吉野明日香氏であり、彼女の聴きとりも2013年1月に本調査チームは行った。